

新田次郎原作『劔岳〈点の記〉』

映画撮影現場からの報告 追っかけ情報 ②



原作の新田次郎の作品は、山岳・大自然が舞台の作品が多く、たくさん映画化されています。しかし撮影の難しさや採算などの理由があって、この作品は残っていません。この作品の映画化には木村監督しかいなかったといわれています。木村監督だから東映に働きかけ、これだけの役者さんを揃えられ、撮影にこぎつけられたといわれています。新田次郎の作品の多くにカメラマンとして携わった監督は、食品偽装・手抜き設計など横行する今の社会風潮に対して、納得できなかったのではないのでしょうか。『劔岳点の記』の中の世界は、愚直なまでの献身と自分の仕事への使命感です。まさに失われた「こころ」なのですから。

「この人が監督をやるのなら全霊を捧げなくてはならない」と参加した案内人・長次郎役の香川照之さんは監督のこの意気に「監督を男にしたい」と応じ、柴崎役の浅野忠信さんも「大自然と闘う過酷ロケに覚悟してきました」と言っていました。

撮影現場を取材した地元新聞社は「もっと楽なところでやっていると思ったら、本当に大変なところでやっているんですね」と驚く。撮影は、最近の映画では珍しい「順取り」といって、台本の時間経過どおりに撮影していく方法をとっているそうです。

つまり、山に登る前のキャンプシーンと、降りてきた後のキャンプシーンは、一緒に撮った方が効率的で楽です。しかし監督はそうはせずに登山前に撮って、下山後にまた

撮る。だから、俳優のヒゲの伸びなどもリアル（ツケヒゲなどでごまかさない）。時間の経過での季節の移ろい、役者の肉体が締まり、頬などがこけていく姿も自然に映像になるといいます。CGや空撮を拒み、柴崎測量隊の視た目高にあくまでこだわっているそうです。俳優さんたちは、ドキュメント撮影だといっているそうです。100年前の柴崎測量官の追体験をしているのだとも。

毎日、撮影地点まで、何時間も（時には十数時間も）登って、撮影して何時間もかけて降りる。この繰り返しで、体重がみな7～8kgも落ちてくるということです。登山は脚力だけでなく全身運動だと実感したと言っています。俳優さんたちは、夜は疲れて早く就寝して、朝は早いし空気はいい「身体が浄化されるようだ」と言っています。

また、この映画は大道具や小道具など、時代考証に手を抜かず厳密に仕上げられているのも見どころだそうです。着ているものはもちろん、テントの布地も、当時のものを調べて仕立て上げる。背負子（しょいこ）や「点の記」を大切に仕舞う鞆、靴裏の鋏に至るまでの凝りようと言うから楽しみです。まさに「映画作り」の原点を、ひと昔前の日本映画全盛時代にしか許されなかった作りを踏襲する「こだわりの映画」と呼ばれているゆえんです。監督は「こういう映画作りを誰かがやらなければ、このまま日本の映画はダメになるんだ」と製作報告会で叫んでいた姿が印象に残りました。（取材 浦郷武夫）